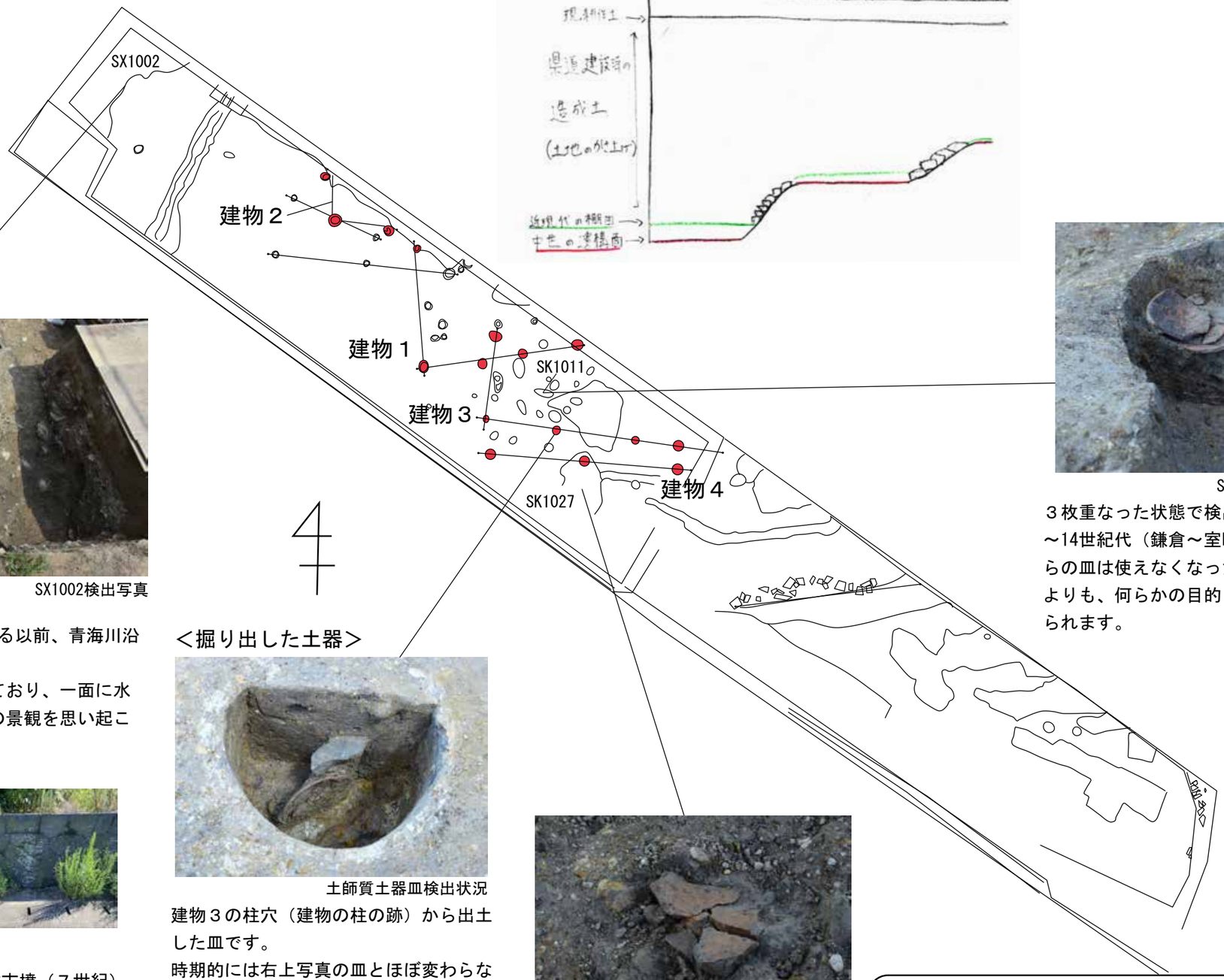
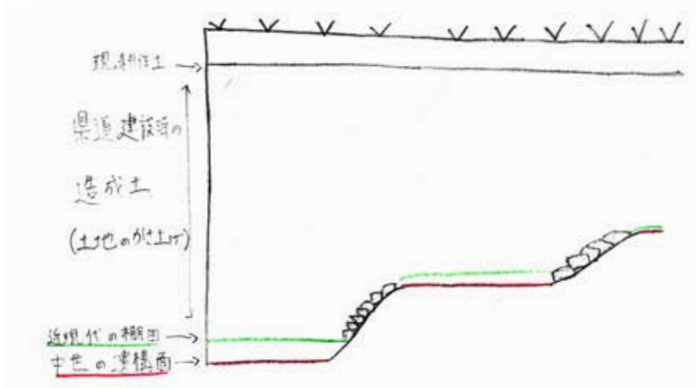
青海神社下遺跡地元説明会　資料

2020.8.23

・調査期間
2020年8月3日～8月31日(予定)
・調査の原因
県道高松坂出線167号線道路改築工事
・調査の主体
香川県埋蔵文化財センター





東
西

SX1002検出写真

＜棚田の石積み＞

県道167号線（さぬき浜街道）が開通する以前、青海川沿いに一段低い水田が広がっていました。
今回の調査では棚田３段分が見つかっており、一面に水田が広がっていた近代（明治～昭和）の景観を思い起こさせます。

左上：中村古墳（７世紀）
右上：渡辺家屋敷跡（19世紀）
左下：ミカン畑の石積み
（20世紀）

＜青海地域の石積み＞

発掘調査で検出された棚田の石積みも含めて、これらはすべて地元の石材で造られています。石材をうまく使いこなし、多様なその地域固有の構築物が生み出されてきたのです。

＜掘り出した土器＞

土師質土器皿検出状況

建物３の柱穴（建物の柱の跡）から出土した皿です。
時期的には右上写真の皿とほぼ変わらないと思われますが、焼成度や技法がやや異なることから、別の生産地のものであった可能性が考えられます。

SK1011土師質土器皿検出状況

３枚重なった状態で検出された土師質土器皿。13～14世紀代（鎌倉～室町時代）のものです。これらの皿は使えなくなったものをただ捨てたというよりも、何らかの目的をもって埋められたと考えられます。

SK1027土師質土器足釜検出状況

ゴミ穴と考えられる大きな穴（土坑）から出土した土師質土器足釜。
他に楠井窯跡（高松市国分寺町）産の瓦質土器擂鉢（14世紀末～15世紀前半）もあり、煮炊きや調理のための土器（厨房具）を投棄したものと考えられます。

まとめ

今回の調査では、建物跡4棟を中心として、中世(13～15世紀)の居住域が確認されたほか、近現代の棚田の石積みが検出されるなど、青海地域で重ねられてきた土地利用の一端が明らかになりました。

遺跡の背後にある青海神社は、崇徳上皇(1119～1164)を祭神として13世紀(鎌倉時代)には成立していたと推測されます。扇状地で地形の変化も著しいこの場所に、現在には継承されない中世の集落ができた背景には、山上の白峯寺や崇徳陵をも含む、上皇への信仰の場を支えた人々の存在が想定されます。このような青海地域と歴史性との関わりを、今後も追究していきたいと考えています。